

雑司が谷と法明寺の歴史

近江正典

■はじめに

法明寺住職の近江正典と申します。私は三十年ほど前に法明寺の婿養子として雑司が谷へやってきました。もともと雑司が谷ではなく千葉の田舎の海辺で生まれ育ちました。房州という意味では、日蓮聖人と同郷でございます。そんなことで、初めて雑司が谷に来た時は「なんて牧歌的なところだろう。ここは街というよりも村だな」という印象を受けました。

法明寺はもともと真言宗のお寺だったと伝えられています。江戸時代の縁起などでは、真言宗だったとも天台宗だったとも言われており、実際のところはよくわかりません。法明寺の縁起によれば、弘仁元年（八一〇）頃に真言宗の寺として創建されたそうです。『吾妻鏡』に出てくる武蔵国威光寺が「稻荷山威光寺」と称していた法明寺の前身の威光寺ではないかという説もあります。すが、これもちよつと怪しい。怪しいのですが、正和元年（一二三二）に、日蓮聖人のお弟子さんの日源上人がこの武蔵野国で布

教しまして、当時の法明寺の威光寺ですね、稻荷山威光寺と言われていたお寺の住職と法論をしました。法論とは、それぞれの宗派が持っている宗義を照らし合わせ、議論することです。議論で負けた人は勝った人の弟子になる——その教義を受け継いで改宗しなければなりません。日源上人と稻荷山威光寺が法論をした結果、正和元年に真言宗から日蓮宗に改宗したという歴史があります。そういうわけで、正和元年をもって法明寺とすることになっています。それからずっと法明寺としては雑司が谷に存在している。雑司が谷という街そのものが、法明寺の、言ってみると門前町のような形で形成されてきたのではないかと思います。

■法明寺の歴史

郷土史を見ると、雑司が谷の由来は諸説あります。ひとつは法明寺の雑司料だったために「雑司が谷」という名前がついたという説です。もうひとつは、南北朝の時代に京都で雑色職にあった

武士たちが住みついたので「雑司が谷」と言われるようになったという説です。

雑司が谷の歴史の中に、法明寺というお寺があつて、そしてその法明寺の門前町のようにして暮らしてきた。雑司が谷は、もともと高田の名字です。豊島区高田という地域がありますが、高田村という大きな村の字のひとつが、雑司が谷でした。高田村字雑司が谷という地域だったと言われています。だいたい池袋二丁目、西池袋あたりから現在の護国寺や音羽の手前あたりまでが雑司が谷だったと考えられています。

法明寺は、雑司が谷と非常に縁の深いお寺でした。天正の頃、現在の護国寺の近くの清土（現・文京区目白台）で、ある仏像が出土し、東陽坊という法明寺の末寺に持って来られました。その後、非常に靈験があるということで、東陽坊に勤めていた若いお坊さんが盗んで自分の故郷である安房国へ持って帰ってしまったました。

そうしたら、そのお坊さんが狂死してしまった。そのお坊さんが死ぬ時に、うわごとで「自分は雑司が谷の鬼子母神である。長い間、地中に眠っていたが、故あつて時が来たので雑司が谷に出現した。ところが、この安房に連れて来られてしまった。不本意なので一日も早く雑司が谷へ戻すように。さもなければとんでもない祟りをもたらす」と言いました。それを聞いた村人は「こんなとんでもない神様はここには置いておけない」と、慌てて雑司

が谷へ戻しました。そのような経緯を経て、法明寺の境内の端の「稲荷の森」と言われていた場所に小さな祠をつくって安置し、現在に至ります。これが、雑司が谷鬼子母神のはじまりです。

■日本の宗教観

日本の神様には二系統あります。ひとつは、土着の日本古来の神様——天照大神や日本武尊といった神道系の神様です。もうひとつは、仏教とともに伝わってきた外来の神様です。鬼子母神もそうですが、毘沙門天や帝釈さんなどはインドから仏教思想とともに伝わった神様です。アジアのような多神教の地域と、ヨーロッパのような一神教の地域では、宗教の伝わり方が若干異なります。仏教の場合、伝わってきたときには、すでに信仰されている土着の神々がいました。その神様たちを守護神として仏教に取り込んでいったわけです。ヒンドゥー教はその最たるものですね。

以前、日蓮宗の広報を担当していた時、インド大使館でガンジー翁の話を聞く機会がありました。ガンジー翁はインドでは「建国の父」と呼ばれていて、身近な神様であるかのように親しまれています。大使館で、私が「でも、インドはヒンドゥー教の国でしょう」と言うと、「日本とちつとも変わらないよ」と言われました。理由を尋ねたら、「だって日本は仏教の国だろう。仏教の御釈迦様は、ヒンドゥー教の十四番目の神様なんだ」と言うんです。いつのまにか仏教はヒンドゥー教の中に取り込まれていまし

た。

なんでも同化して一緒に取り込んでしまうという考え方は、おそらくインドからアジア全域、日本にもあります。日本は多神教国家ですから、信仰の点から言えば非常にいい加減です。日本人にとって神様は、困ったときに助けてくれる存在です。だから、悩みを解決してくれない神様は日本では通用しません。鬼子母神も仏教とともに日本にやって来ますが、まるで日本に昔からあった神様のごとく信仰されています。

立教大学で宗教の話はしづらいんですが（笑）、私の個人的な考えでは、日本人は独特の宗教観を持っています。よく「信仰がない」と言われますが、それは日本人の宗教観が非常に複雑でわかりにくいからだと思います。一神教の宗教観は簡単です。唯一存在する神様を信じるか信じないか、これだけで答えが出ます。ところが、多神教の国家や民族にはいろいろな神様がいるんですね。

日本人の宗教意識は、非常に強靱なプラットホームのようなものいろいろな宗教を載せてしまう、いわば「日本教」です。たとえば、マイクロソフト社の windows にいろいろなソフトが入っているみたいに、日本人の信仰的なプラットフォームの上に、神道や仏教、キリスト教が載っているわけです。そして、その中から自分に都合のいいものを持ってきて信仰します。日本人は、地元神社に子どものお宮参りに行き、親族が亡くなったら菩提寺

へ行ってお葬式をし、教会のチャペルで自分の結婚式をします。その時どきに必要な神様が現れて、それぞれ分業しているわけです。これが多神教国家です。これを、一神教のまじめなキリスト教の人が見ると「あいつら何やってるんだ」ということになりません。

学生の頃、遠藤周作さんの『沈黙』を読みました。その中で、ロドリゴという神父が信徒の密告によって捕まっています。そして、「お前が踏み絵を踏んだらお前の信徒を助けてやる」といわれ、ロドリゴは悩みます。踏み絵を踏むことは神様との契約を破ることなので、なかなか踏めないわけですが、踏まなければ自分の信徒が目の前で殺されてしまう。とうとう最後に、神様の踏み絵を踏んでしまいます。それは、「お前の心の苦しみを一番わかっているのは私なのだから、私を踏みなさい」という神様の声を聞いたからでした。つまり、神様を信じて踏んだわけです。そういう時に声をかけてくれないなら、なんのための神様なんだ、という考え方です。日本人は『沈黙』を読んでこの理屈に誰もが納得します。当時、私も納得しました。

ところが、これをアメリカ人が読むと、「なぜ踏み絵を踏むんだ。信徒は殉教しているのだから、ここでロドリゴが踏み絵を踏んで神様との契約を破ったら、信徒は天国へ行けない」と言います。遠藤周作はクリスチャンでしたが、『沈黙』を発表した時、アメリカのクリスチャンから「あれは異端だ」と言われたそうで

す。

果たして踏み絵を踏んでいいのか、悪いのか。学生の頃に友達と話したことがありますでしたが、そこにはどうも日本教のプラットホームが潜んでいるような気がしました。日本人はいろいろな信仰をしますが、日本教のプラットホームに載ってしまうと、宗教の性格が日本教化します。つまり、仏教や他の宗教をジャパンナイズしてしまうんです。ですから、神様や仏様が日本人に合わせた性格に変わっていくような気がします。たとえば、クリスチャンが話すマリア様のイメージを聞いていると、限りなく観音様に近いことに気付きます。観音様とマリア様の違いについて話し合ったことがあります。キリスト教も文教も日本化されているのではないかということになりました。

立教大学でこんな話をすると神学の先生から怒られそうですが、仏教は最も日本化されています。たとえば日蓮宗、あるいは浄土宗のような教えを中国やインドの仏教徒に話しても全く理解ができないでしょう。それはなぜかという点、日本化されて独特に発展してきたからです。

■鬼子母神信仰と女性の力

鬼子母神信仰は、基本的には安産とか子育て、つまり子どもを守る神様として信仰されています。江戸時代は子どもの死亡率が非常に高く、医学にはほとんど頼れないので神頼みしかないわけで

す。子どもを守ってもらうところから、鬼子母神信仰が盛んになりました。

仏教では、女性は執着が強くて成仏できないというのが前提にあります。なぜ女性が男性よりも執着が強いとされるのかというと、出産するからです。自分のお腹から子どもを産み出すので、産む力というのはそのまま子どもへの執着となるというわけです。その子どもへの執着は母性となって子どもを育てます。しかし、その執着がないと、子どもを育てることはできません。育てる力は、実は子どもへの執着だとされているわけです。そういうわけで、女性は子どもへの執着から逃れられないために成仏できないということですが、仏教の前提としてありました。

女性の成仏を説く必要が生じた時、大乘仏教はいろいろ考えました。そして、法華経という経典の中で、女性の成仏——女人成仏を説きました。江戸時代には、女人成仏を説く法華経を多くの女性が信仰し、その中に大名の奥方がいたりして、大きな力となりました。こうしたことから、日蓮宗には女性の信徒が多くいました。当時は戦や何かでご主人をなくす未亡人の女性が多く、そういう人たちが、自分の夫や自分自身の行く末を心配して信仰していたのです。

熱烈な信仰者として有名なのは、徳川家康の側室であった長勝院お萬の方です。日蓮宗の七面山という修行のための山があります。ここは長い間、女人禁制でしたが、お萬の方は徳川幕府の権

力によって、七面山の女人禁制を破りました。それ以来、七面山は誰もが登れる山になりました。

もう一人の熱烈な信仰者は鬼子母神堂を建立した自昌院です。自昌院は、広島藩主の浅野光晟の正室です。もとは、加賀の前田家三代目の前田利常公の息女でした。前田利常の妻は二代將軍徳川秀忠の娘ですから、自昌院は前田家のお姫様であり、徳川家の外孫ということになります。そして浅野家に嫁ぐときには三代將軍の家光の養女として嫁ぎました。そういう人ですから、非常に権力もあり、鬼子母神堂を寄進しました。現在の鬼子母神堂の本殿は、自昌院が建立したものです。今年で開堂三百五十年となり、七月二十五日に国の重要文化財に指定されました。

自昌院は、不受不施思想の支持者でもありません。「不受」とは日蓮宗の信徒以外から布施を受けないことです。そして「不施」とは、日蓮宗の信徒は他宗の僧侶に布施をしないことです。

お釈迦様が説いた経典は、たくさんあります。阿弥陀経や華嚴教など、いろんなお経があります。そうした中で時代によって抛り所とする経典は変わります。鎌倉時代の初めというのは「末法」の時代の始まりでした。末法とは「誰も成仏することができない」と言われた時代です。その末法という時代にどのような経典が必要なのかということ問われた際に、日蓮聖人は法華経を選びました。つまり、日蓮宗にとって法華経以外の教えを説くことは、お釈迦様の本来の教えに背くことになります。他宗や法華経以外

の教えを説くことを「謗法」といいます。謗法を止めるために、他宗、法華経以外の教えを説いている人たちへの布施を止める必要があるということで、「不施」という思想が生まれました。

さらに、不施なのだから他宗からもらってはいけないのだ、というところで「不受」という思想が起ります。信徒以外からの布施を受け取ると「あなたの信仰は間違っているよ。こうでなきゃいけない」と言いにくくなるからです。そうすると、信仰の純粋性が失われていきます。それを防ぐためには、他宗の人からの布施を受けないことが一番いいということで、「不受」の思想があります。

自昌院は、こうした不受不施思想を支持していました。ところが、徳川幕府は浄土宗を信仰していますから、幕府から呼ばれてお布施をもらおうと「不受」に背くことになります。そこで、幕府からの布施を受けないということを表明したところ、「これは公儀の意向に背くものだ」ということで、信仰を禁じられました。そうした中で、不受不施思想を守ったのがこの自昌院でした。自昌院は、宗教的な理解の深い人で、かつ意志の強い人でもありません。

そうした中で、信仰の流れとともに、鬼子母神信仰が雑司が谷の人たちに現在まで引き継がれています。雑司が谷に住む人たちの間で、鬼子母神さんへのお参りが広まって、のちに江戸の市中の人たちが雑司が谷をお参りするようになり、現在の鬼子母神の

信仰の形になりました。そこから現在の雑司が谷をとりまく環境ができたのではないかと思います。

■雑司が谷の御会式

御会式とは、その宗派を開いた祖師の命日に行う法会のことです。本来各宗派にあります。日蓮宗で御会式といえば、日蓮聖人のところにお参りに行くというのが本来の形です。ところが、不思議なことに、雑司が谷で御会式と言うと、誰も何も疑わずに鬼子母神堂へ行きます。これは雑司が谷だけで、ほかのどの地域へ行っても御会式では必ず日蓮聖人のところにお参りに行きます。これはおそらく雑司が谷の人たちがそれだけ身近に鬼子母神信仰をしているということでしょう。

御会式では、万灯という大きな明かりを持って練り歩きをします。万灯というのは「万の灯」です。暗いところで明かりを灯すと物が見えるように、人間が仏さまの知恵を身に着けると今まで見えなかった本当の姿が見える。ですから、灯というのは悟りの象徴であり、知恵の象徴です。多くの知恵を灯すという意味で万灯があるのですが、御会式の場合には、日蓮聖人が亡くなったときに桜の花が咲いたという故事にちなみ、桜の花を万灯にたくさんつけます。それを持って、雑司が谷ではなぜか鬼子母神堂へ行ってしまう。そういう御会式がこの雑司が谷にはあります。

■おわりに

雑司が谷と鬼子母神堂、あるいは法明寺の関係についてお話ししました。江戸時代から鬼子母神は雑司が谷の氏神でしたから、雑司が谷の人は皆、鬼子母神の氏子です。そうした意味で、いまだにそんな関係でつながっていて、鬼子母神堂あるいは諸行事が成り立っています。そうしたものが、ユネスコの未来遺産、そして豊島区の重要文化財になりました。こうしたことの根底にあるのは、人と人とのつながりだと思います。ありがとうございます。

(おうみ・しょうてん 法明寺住職)

※鬼子母神の「鬼」の表記は本来「角」のない字を用いています。